# 会報

有田史談会
事務局
佐賀県西松浦郡有田町上幸平 1-8-5
TEL　090-4740-4752
HP　arita-sidankai.sub.jp/
arita-sidankai@hotmail.com

## 一年の集大成！「会報」9号発行

有田史談会の発足から8年目に入りました。一昨年の令和3年から年2回の「会報」発行を行うようになり、会員の皆様には日々自己研鑽に努め、会報発行月の投稿に備えて頂いており日頃より感謝しています。

投稿は自主的に行い、内容も自由で原稿の文字数など制約はありません。何よりも皆様が楽しんで投稿されることを切に願っています。

毎回の「会報」第一面には、史談会の活動を中心に掲載していますが、コロナ禍で活動が出来ないばかりか、大橋先生の講座が開催出来なくなったことが一番残念でなりません。毎月開催してきた例会も感染防止を最優先にこの3年間中止することになりました。屋外での活動に限り、昨年秋から感染防止を徹底しながら実施してきましたが、従来通りの活動にはほど遠いのが現状です。

令和2年2月に開始した「有田八十八ヵ所札所巡り」は、止む無くコロナで長期にわたって中断しましたが、昨年から再開することが出来ました。参加者は少数ですが今後も無理のない範囲で実施する予定です。次年度中には八十八ヵ所全てを巡る計画です。運動不足解消をかねてご参加下さい。

今春5月、コロナは従来の「2類」から季節性インフルエンザ並の「5類」に引き下げが予想され、活動に弾みがつくことが期待されます。

今年は全会員が待望の大橋先生の講座が実現しそうです。時期は未定ですが、先生のご予定に合わせ無理のない開催が出来ればと考えています。今後のコロナ感染状況を注視したいと思います。4月から新年度になりますが、楽しい活動再開を目指しましょう！

## 2022年度「活動報告」

4月　史談会通信第24号発行
5月　史談会通信第25号発行
6月　史談会通信第26号発行
7月　史談会通信第27号発行
　　会報7月15日号発行
8月　史談会通信第28号発行
9月　史談会通信第29号発行
10月　史談会通信第30号発行
　　有田八十八ヵ所札所巡り
11月　史談会通信第31号発行
　　古窯跡めぐり（波佐見）
12月　史談会通信第32号発行
　　有田八十八ヵ所札所巡り
1月　史談会通信第33号発行
　　有田八十八ヵ所札所巡り
　　会報2月20日号発行準備中
2月　史談会通信第34号発行予定
　　有田八十八ヵ所札所巡り予定
3月　史談会通信第35号発行予定
　　古窯跡めぐり（波佐見）予定

※コロナが落ち着けば白石町の稲佐神社・吉村天満宮の見学を検討中！

## 白石町　稲佐神社・吉村天満宮見学　検討中！

相変わらずのコロナに振り回される毎日が続いていますが、何の計画をするにも安心安全が最優先であるべきと、皆様と共に楽しい史談会の集まりにしたいと考えております。

3月以降、桜の花が咲く頃になればコロナも落ち着くのではと期待しつつ計画を練っております。

今回、井手邦男さんが投稿された「吉村新兵衛ゆかりの地　白石町稲佐神社・吉村天満宮を訪ねて」の白石町は2019年3月14日に実施した**「須古城址探訪」**で11名で訪れましたが、この時はまだ肌寒くて車中にて昼食をしました。初めて食べる須古寿司が美味しかったことも皆様の記憶に残っていると思います。でもムツゴロウを食べた記憶がありません。皆さんはいかがでしたか？

今のところ、坂井会長と事務局だけの密室で二人だけの会話なので、決定はしていませんが、皆様の意見をお聞きした上で実施するか否か決めたいと思っています。

皆さん、花見を兼ねて「須古寿司」をまた食べに行きませんか？

白石町須古地区の郷土料理「須古寿司」





## 他愛のない話

坂井　勝也

三十年前、深川製磁の深川剛専務と京都に行ったおり、アサヒビールの社長樋口広太郎さんの話を聞く機会がありました。それは、「これだけ守れば、喰いっぱずれがない」という他愛のない話で、「顔はニコニコ、声は高く、姿勢は低く、最後はウイズアップだよ」という話です。

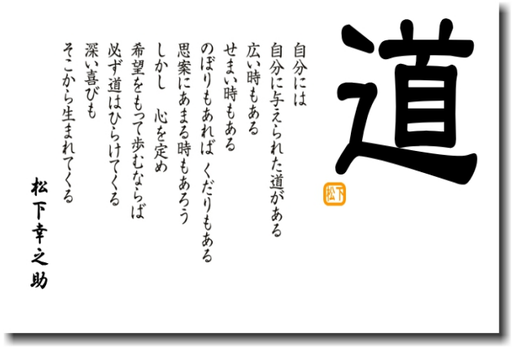
顔はバカと思われるぐらいニコニコせよとのことです。声を高く、樋口社長の話す声は、有田文化体育館と同じ広さの会場でしたが、マイクがいらないくらい高くはっきりした声でした。姿勢を低く、これは頭を低くして教えを乞えと言う事です。アサヒビールが夕日ビールと言われた時代、樋口社長がライバルのサッポロビールの社長に頭を低くして教えを乞い、そこからヒントを得て、アサヒビールの立て直しに成功したとのことでした。

京都では、琵琶湖商法という言葉がありますが、琵琶湖は低い位置にあり、すべての水が琵琶湖に集まり、出るところは一か所だけ、その水の勢いを利用して日本で最初の水力発電が行われたとのことです。姿勢を低くして教えを乞い、やる時には一気にヤレとのことです。最後のウイズアップは、お互いに切磋琢磨して、アップせよとのことでした。

深川専務が樋口社長に挨拶に行かれた時、二人が高い声で旧知のように話をされていましたので、アサヒビールの樋口社長がよく深川製磁をご存知でしたねと深川専務に言いましたら、深川を初めて知りましたと言われたそうです。一流会社の社長というものはああいうものだと感心しました。

私事ですが、二月に八十歳を迎えます。よく人に迷惑を掛け失敗を繰り返して八十年。人生で一番大事なのは、人間と人間の繋がりだと実感致しました。

本を読んでいましたら、松下幸之助さんの「道」に出会いましたので紹介致します。




「自分には　自分に与えられた道がある　広い時もある　せまい時もある　上りもあれば　下りもある　思案にあまる時もあろう　しかし心を定め　希望を持って歩むならば必ず道はひらけてくる　そこから生まれてくる」

次に稲盛和夫さんの「生き方」より、「この世へ何をしに来たのか」と問われたら、私は迷いもてらいもなく、生まれた時より少しでもましな人間になる。すなわち、僅かなりとも美しく崇高な魂をもって死んでいくためだと答えます。」

新年にあたり少しでもそういう境地に近づきたいとひそかに思っています。

## 嬉野茶祖　吉村新兵衛のゆかりの地
## 稲佐神社・吉村天満宮を訪ねて

井手邦男

私はいろいろな神社や由緒巡りをしていますが、五年ほど前に吉村新兵衛の墓が白石の稲佐神社に祀られていると聞いていたので、今回は稲佐神社を訪れてみました。

稲佐神社は杵島山の東麓、杵島郡白石町に鎮座する神社です。門前(一の鳥居の前)は長崎街道です。ここから約1㎞先に二の鳥居があります。二の鳥居をくぐった参道の石段は自然石を敷き詰めた参道で、県内最長だそうです。稲佐神社の鳥居は肥前鳥居です。

皆さん肥前鳥居をご存じでしょうか。肥前鳥居は、室町時代の末期から江戸時代初期にかけて多く造られており、その特色としては各部分が3本継ぎになっています。柱の下部に亀腹を設けず、柱の下部を削り出して、生け込みになって柱の上部には、台輪をつけ楔を設けないなどがあります。

白石町の稲佐神社

稲佐神社の宮司さんに稲佐神社の由縁を聞くと、稲佐神社が祀られるよりも以前から寺が立ち並んでいて(十六坊)、平安時代には神仏習合(日本古来の「神」と外来の「仏」が融合)の思想が広まり、稲佐神社が祀られ、寺が大小の神社の宮司の立場にあったとのことでした。

## 稲佐十六坊の跡

『杵島山の仏教文化の中心が稲佐神社と稲佐十六坊跡です。神仏習合時代から真言密教の道場として、人々の家内安全と無病息災を祈願してきました。境内には樹齢６００年を超える２株の大きな楠の木があり、どちらも県の天然記念物に指定されています。また、毎年10月19日の供日には秋祭りとして「流鏑馬」が行なわれています。稲佐神社参道の石段両側には、かつて８坊ずつ16坊の真言宗寺院があったが、稲佐泰平寺は享保５年(1720)の火災でほとんど焼失し、十六坊の近郊にあった宝珠院の住職が享保９年(1724)に復興したと伝えられています。現存しているのは、玉泉坊・観音院・座主坊の３ケ寺のみになっています。』

白石町教育委員会

吉村新兵衛の供養碑がある吉村天満宮

更に稲佐神社の宮司から、吉村新兵衛の供養碑は神社境内の駐車場脇にあり、吉村新兵衛のゆかりの地として吉村天満宮があることを聞きました。もちろん私はその足で吉村天満宮を探し訪れてみました。場所は分かりにくい感じで空き地にポツンと社殿がある感じで質素な感じがします。

### 境内の由緒書き

『吉村天満宮がある吉村地区は、今から1000年程前にすでに有明海の海退によって陸地化し、耕作がなされていたものと推定される。居民は菅原道真公の学徳を慕って大宰府の宮に参詣し、国土安穏と五穀豊穣を祈ること数十年、その霊験に居民の信仰はいよいよ高まり、遂に吉村の地に小祠を建てて菅公を祀るに至った。

世は戦国の時代となり、当地域も戦やまず、天正２年(1574)大串太郎右衛門という者、竜造寺隆信の為に須古の平井経治と戦い、敗れ追われて一心に神を念じ、その危難をこの社の厨子に潜んで避けた。時に敵兵が追いかけて来て神殿の扉を蹴破り中を探すと、入口は蜘蛛の巣がはりめぐり、中から鳩が飛び出た。これを見て社殿を深く詮索せずに去ったため一命を助かったという。後、太郎右衛門はこれ神助であると感謝し、この天満宮の堂を再建し、以後は「大串」の姓を「吉村」にかえ、家紋の「鱗形剣菱」を「梅鉢」に改め住居辺田村(今の白石町錦江地区)の居屋敷に天満宮を勧請し守護神として祀った。・・・・・・

吉村新兵衛は、郷士大串太郎右衛門の子であった。白石南郷(今の白石町錦江・竜王地区)の大庄屋となり、更に役職について鍋島勝茂公に仕えて、後嬉野郷皿屋谷に移住したが、故あって職を辞し、慶安三年(1650～1651年)の半ばに志を茶業にたて山谷を開墾し茶樹を栽培し製法を考究して隣保に奨め、今日の嬉野茶の基礎を築いた。』と記され、敷地内には「嬉野茶祖吉村新兵衛ゆかりの地」碑が建てられていました。

前回お伝えした内容の吉村新兵衛の所縁に関して散在していた情報を集約でき深く知ることが出来ました。

まだまだ白石の地には有名な歴史と結びついた場所がたくさんあるようなので、今後も巡ってみたいと思っています。

稲佐神社の御朱印

# 肥前のやきものの魅力

山口 信行

## 初期伊万里の魅力

『古伊万里』と云えば江戸時代の有田焼であるが、特にその中でも、初期の有田焼を「初期伊万里」と呼んでいる。製作年代がおおむね1650年代以前の、素焼きをしない、云わゆる生の生地に下絵を施したりして釉薬をかけて焼成したものである。1640年代に色絵が始まり、これも厳密には初期伊万里になるが、この場合特に初期色絵（初期赤絵）として区別している。区別していると述べたが、これはあくまで古いもの、云わゆる骨董（古美術）としての立場から見た場合を言っていて、私は学者でも研究者でもないので、あくまでも基本的な立ち位置はそこからの感想、意見である。これから古伊万里の魅力を探っていきたいと思うが、そのことを前もってお断りしておきたい。

初期伊万里の魅力、それは何といっても個人的には、「染付」の作品（器物）にそれを強く感じる。云うまでもなく、初期伊万里には、染付以外に、瑠璃釉を施したもの、錆釉，青磁釉、白釉等もあり、有田では初期の段階からこれらの作品を見る事が出来て本当にその種類の多さには驚かされる。

なかでも特に魅力的に思えるのは、染付の初期伊万里である。呉須で伸び伸びと自由奔放に、山水、動物、植物、人物等が描かれ、それらに触れると、私なんぞは何かしらホッとした気持ちにさせられるものがある。中には何を描いたものか、よく分からないものもあり、それはそれで当時の稚拙な描画のようでもあり、また心が和むから不思議である。逆に見事な筆致で山水を描いた大皿などもあり、その見事な描写は手慣れた感もあるが、そういうものに触れると心が騒いでしまう。

染付大皿などは、ほとんどが黒牟田の山辺田古窯辺りで製作されたものと云われているが、その筆致からは、当時の人々が初めて手にした唐呉須を用い、どんなにか喜びに満ちた気持ちをもって山水等を描いたのだろうかとすら想像する。

染付山水大皿　大和文華館蔵

以前、九陶で催された『初期伊万里展』で展示された、大和文華館所蔵の『染付山水大皿』を直接直に見たときなどは、その前からしばらく私は離れることが出来なかった。たっぷりと使用した呉須で、山々を力強く描いた大皿は誠に見事で、どうだと云わんばかりのその迫力はすさまじく、胸に迫ってくる。もちろん黒牟田の山辺田古窯作であり、現在国の「重要文化財」であるが、「国宝」としても良いとすら私には思えている。

初期伊万里の形状は、口径に比し高台径も小さく分厚い作りの青みがかった生地に、フリモノ（不純物）等が表面にかかっていたりして、現代の制作、販売基準からは、おそらく失敗作として扱われるに違いない。でもそこには、国産磁器を初めて作り始めた当時の陶工たちの息吹きがまさに聞こえてくるようで、伸び伸びとしたプリミティブな魅力をもった作品類であるとつくづく私は思う。

また、この時期には描写技法も魅力的なものが生まれている。特に現在でも大きな人気を誇る、吹墨技法を使った初期伊万里の魅力もその一つである。

染付吹墨月兎文皿
九州陶磁文化館蔵

月にうさぎのモチーフ等は、日本では好まれる画材であるが、それを中国の皿にならった吹墨技法で描いた「吹墨月兎中皿」などはとても人気があり、その技法をすぐに取り込んだ当時の陶工たちの見識にも驚かされてしまう。技法と技術を大胆に取り込み作陶に挑戦していた当時の陶工への思いと共に、彼らが残した作品類を目にすると、畏敬の念すら湧き上がって来るのである。

染付蓮鳥文小皿　個人所蔵

その辺りに思いを馳せるとき、初期伊万里の幅広い人気の秘密がうかがい知れて来るように思う。

## 前期（寛文期）伊万里の魅力

染付伊万里磁器で、初期伊万里に次ぐ時代の磁器を「寛文期伊万里」と九陶では扱ってある。製作年代は、1650年代から1660年代にかけての時期である。朝鮮陶工により製作され始めた初期伊万里形状の器は、中国の技術を取り入れ、高台が広く薄い作りを目指すようになる。泉山陶石の材質上、焼成時のへたりを防ぐための支えの必要性から高台内には針支え跡の「目跡（めあと）」が残るようになる。染付磁器では、総じて呉須の色が薄く感じられるのも特徴で、この時代、まだ素焼きはされてないのが多いようだ。それで、この寛文時代の染付磁器に関して、次のように業界（骨董界）での表現がなされている。すなわち、**“生がけ、薄墨、薄作り”**である。生がけとは、素焼きをしていない状態での釉薬をかけて焼成したものを表したものだろうかと思われる。薄墨とは総じて呉須の濃さが薄いのを意味するが、もちろん濃い呉須もなかにはあるが、一般的には色調が薄いようである。

また、これも一般的に、初期伊万里と比べて厚さが薄く仕上がっているのが特徴と云えるのである。それと、このような焼物を焼いていたのは、以前には石川県の九谷で焼いていたと考えられていたためか、有田産の寛文期（1650～1660年代）の染付の焼物を「藍九谷」と呼んでいたことが知られている。残念ながらこの名称は、現代でも骨董業界では使用されていて、産地を連想させる意味では、誤った認識が残されたままとなっている。

もちろん、古美術を扱う業者は、今では当時の有田産であることは一般常識となっていて、とうに知ってはいるのであるが、その事実が分かってはいても、従来よりの呼び名までは変わらずに残って現在まで使用されている。肥前のやきものを愛するものとしては、何とも釈然としないものがある。本来ならば、「藍伊万里」または、「藍有田」であるべきなのであるが、現状ではそうなってないのが残念でならないのだ。

染付カササギ文中皿
九州陶磁文化館蔵

染付扇文中皿　個人所蔵

この寛文期の染付の魅力は、何といってもデザインの多様性にあるといっていい。しかもそのデザインは洗練されたものが多く見事なものがある。現代人が見てもウ～ンとうなってしまう秀逸なものも存在する。しかも絵の技術も確かなものがあり、私の主観ではあるが、もし現代人がそのデザインを古伊万里から学ぶとしたら、この時代のものを学ぶのが一番であろうと私は考えている。

## 鳥居元

前田　順三

現在、岩谷川内の旧有田町役場跡地に移転したが、一昨年（2021年）まで本町に「佐賀銀行有田駅前支店」があった。

以前はその付近の地区を「鳥居元」と言っていた。その語源は、以前銀行のすぐ西側に酒屋と陶磁器商があり、その間に北東に向かう道があった。昔その道は椎谷神社への参道であり、参道入口として鳥居が建っていたので「鳥居元」の名で呼ばれていた。その鳥居は大正10年道路整備の際、現在の椎谷神社境内の堤の横に移されている。その鳥居の向かって右柱には「明治廿三年庚寅（こういん・かのえとら）」とあり、左柱には「保嘉尾（ほかお）宿　戸杓　氏子中」とある。「保嘉尾」の文字は縁起を担いで「外尾」の文字を変えたのであろう。

大正10年に椎谷神社の堤横に移設された鳥居

その「外尾宿」であるが、現在の本町地区を江戸時代より「外尾宿」と言っていた。それを昭和22年1月1日、有田村が東有田町に改称した時に、外尾神社（ふげんさん）下から、有田駅前の鳥居元までを「本町」、鳥居元から南川良橋までを「原宿」に分けたと有田町史通史編にある。そして昭和30年後半から40年前半頃だったと思うが、両地区が合併してまた現在の「本町」となっている。

かつての椎谷神社参道は、現在佐賀県陶磁器工業協同組合の建物があるところにあった外尾小学校への通学路として使われたが、有田駅構内に踏切があり、児童の通学に危険であるということで、踏切を西に移動しガード（トンネル）を設置したとのことである。そのガードは本町・向歯科横から外尾町への通路として現在も使われている。

佐賀新聞

トンネル抜けて近道

カメラスケッチ

有田駅西側の地下道

ガードのことを書いた佐賀新聞記事（2022.5.11）





## 桑古場土

馬場　正明

大正十年に発行された地質調査所の『工業原料用鉱物調査報告』第五号には有田区域から大外山区域までの皿山区と皿山外区の佐賀県下の陶磁器原料調査報告が掲載されていて、泉山土、白川土、桑古場土、大河内土が紹介されている。

泉山土や白川土は有田焼に馴染みがあるものの桑古場土は馴染みがない。読み進めると

「桑古場土は、有田村の字、桑古場地内で採れたもので、調査が行われた大正期には有田町の南西端に近接した区域が採掘場だった。

その沿革に就いては証拠となる記録はなく、言い伝えによればその発見は泉山よりすこし後世だと云われてる。

この区域は蓮華石山の南西方向に位置する低平な丘陵地であり、面積は約三十町歩（30ha）余りで、白色細粒状の流紋岩で出来ていて、表面は厚さ約五尺（1.5m）の表土に蔽われていて概ね畑地である。桑古場土は流紋岩の風化した原生土で、丘陵地に亘って表土下の厚さ約三尺（0.9m）にあり、その下の母岩の厚さは約四尺（1.2m）で、この部分は半ば風化し、ぼそぼそである。

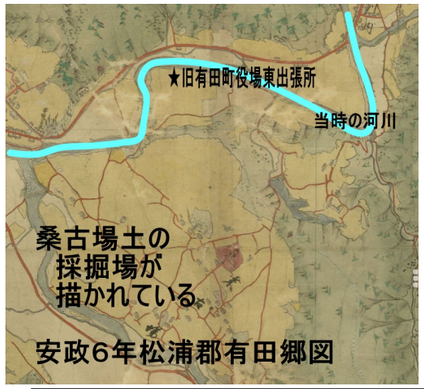
陶土は細粒で、白色、緻密で、粘り気に乏しいが製陶用鞘土に適するにから、古来より有田の陶業者間ではこれを耐火粘土として珍重してた。　桑古場土は三尺（0.9m）の厚さで三十町歩（30ha）に亘り埋蔵、その量は約五十四万トン或いはそれ以上と推計される。」とある。

安政六年松浦郡有田郷図には、当時の様子が現代のストリートビューの様に描かれている。例えば本窯の登窯は窯焼の屋敷内でなく、傾斜した山岡の上に作られ、一窯ずつ高くして連ねた様子が描かれている。

また、川沿いに描かれた屋根は原料粉砕の水碓小屋の屋根、窯焼きの屋敷内には素焼き窯が描かれている。

同じ様に、泉山の土場や、白川谷の白川土採掘場、中野原の八坂神社奥の祇園堂土採掘場、ひらきや長吉谷のひらき土採掘場には石塊が散在している様子が描かれてそこが陶土などの採掘場であると推察されるが、新村（後有田村）の桑古場の天神社そばにも石塊が散在してる様子が描かれていて、ここが安政の頃の桑古場土の採掘地ではないかと思われる。

【参考図書】
「工業原料用鉱物調査報告第五号」（国会図書館デジタル）
「有田町史」陶芸編



## 家康が演出して「平和ボケ」の日本人気質を作った！

鶴　一樹

先日、BS放送で〝英雄たちの選択〟という番組で、徳川家康が22才の時、決断を迫られた時のどっち？が放映された。

信長が桶狭間の戦いで勝ったあと、家康は信長の傘下にはいった。駿河を統一にかかったが、一向宗の寺が沢山あり、すぐこの強大な軍事力と富を持つ勢力とぶつかった。劣勢のまま膠着状態になったが、優勢であった一向宗の方から和議を申し込んできた。

わしらには勝てんやろ。もうやめようやないかと〝降参せい〟と迫ったが、武士が町人農民に負けるわけにいかんと拒否し、断固戦うか？どっちかの決断をしなければならなく

なった。和議を受け入れるとなめられる。武士のメンツにかかわる。さあ、どっち？家康は和議を受け入れた。

やがて、固い守りの城のような寺は堀を廻らしていたが、家康はどんどん毀し始め、堀を埋めて寺を無力化した。寺の方は約束が違うじゃないかと文句をいうと、「もとにもどす」と、引き揚げて戦いを止めるのではなく、「もとは野原じゃ」と徹底的に破壊してしまった。

このやり方は戦国の世では当たり前のことだったが、若き家康さまが苦労人でしっかりわきまえていたという話。本音と建前。ホンネは隠しておいて、キレイごとで飾っておく。世は下剋上。建前キレイごとを言って和議をして、すぐ仮面を脱いで本性ホンネを現す。卑怯なやり方、裏切りなんでもあり。勝てば官軍。人の噂も七十五日と後は取り繕いごまかして、しゃあしゃあとしている者が覇者となる。

ついに天下を取った家康。昔から日本人にとって絶対神は天皇であった。仏・菩薩が乱世を鎮めるため、特別に神様、仏様、家康様を使わして、平和の世の中を作ったと。だから天皇より上の位置に立った。東照大権現様として祀りなさいと、誰も逆らえない国家がスタートした。

徳川二代、三代と締め付けは代々強化され、大名も整理され太平の世が二百七十年続いた。平和でおとなしい文化的な国と人が出来た。

## 鶴一樹のメダカ通信

冬眠中のメダカたち、春のような陽気に誘われ少し動いている。無事に２００～３００匹が元気に〝越冬成功〟といっていい。

今年も忙しいメダ活の毎日が始まる。楽しみ！　どんなメダカを買おうか。品種が多すぎて、わけがわからないメダカの世界。

# ハートつなぎの一歩が始まる年

鶴　美百合

新年あけましておめでとうございます。２０２３年も史談会の皆様よろしくお願いいたします。また、今年の干支はうさぎですね。史談会の皆様には、「ホップ・ステップ・ジャンプ！！」のウサギを越えるご活躍をして頂ける年になりますようお祈り申しあげます。

さて、ウサギといえば、昨年でしたが、知人から送られてきた、ハートのウサギのやきものの置物が驚きでした。と、みれば、「ふひゃあ～なんだこれは？と御覧の様に、たぶん皆様が感じられているように私も感じました。

しかし、作者はエミール・ガレという、フランス＝レタップ製陶所（1877-1874）アールヌーボを代表するガラス工芸家・陶器・家具のデザイナー、アートディレクター企業経営家、そして、植物学者だそうです。

すごい、二刀流ではものたりない才能があふれてらっしゃる方なんですね。それに、嬉しいのは、日本美術に高い関心を示されたそうです。なるほど、あっ、そういえば、お宝鑑定団にもでていました。

ところで、エミール・ガレさん、名前は女性と思ってしまったのですが、女性ではありませんよ。それなのに、男がハート？を描くか？　と先ほどから思われているのではありませんか？　♥を青い上絵で、ウサギのボディーに大胆に描いています。

ついでですが、眉毛も描いてあるのでご覧あれ！

さて私は、何を言いたいのだと思われますか？　ハートについて、一般的には、だいたい男性はハート・マークが苦手ではないでしょうか？

しかし、ガレさん、そんなの関係ない、と言わんばかり描かれています。今でいう、最先端のジェンダーレス（平等）化を先取りしていたのではないでしょうか？　そんな、彼の作品にはやはり、奇想天外な面もあらわれているようです。





さて、前述の愛知県陶磁美術館、再び登場します。　エミール・ガレさんで驚いてはいけませんよ。愛知県陶磁美術館には、フランスもあれば、ペルシャの陶磁器も、もう、世界各国の歴史陶磁と芸術性あふれる幅広いコレクションが展示されているのだそうです。それは、まるで織田信長のように、まさに、ボーダレス美術館（国境はない）だとお見受けいたしました。

「黄地多彩文鉢」

さあ、さあ、みなさん、この美術館でいっちゃん、はじめに（一番に）驚くのは、一体、何だと思われますか？恐れながら申しますと、個人的にですが、私は、ピン！わあ～ときた作品名は「黄地多彩文鉢（おうじたさいとりもんはち）」です。

私はこの文様を見て、この鉢に描かれている〝ハートつなぎ〟文様にがぜん注目いたしました。

なぜなら、私は、ここ数年、「なぜ、有田にハート繋ぎ文様があるのだろう？」と考察しておりましたので、このハートつなぎを観たときに、これこそが、ハートつなぎの源流にちがいない！とピンときたという訳です。

それでは、この鉢の説明文を、美術館の文から引用します。

〝このイラン東北部（9－11世紀）では紅色の素地に白化粧土をかけた上にさまざまな色の顔料や釉を使って文様を描いた彩画陶器がつくられた。描かれた文様はアラベスクと呼ばれる幾何学文や植物文、文字文のほかに、動物や鳥、人物など多彩な題材が見られる。本作品は黄釉をベースに鳥やハート文様がユーモラスに描かれており、日本にあるイランの彩画陶器のなかでも優品の一つとして知られている。（高さ11.5、口径32.3㎝）〟とありました。

このように、説明文では、このハートは〝ハート文様〟と判明いたしました。よかった！よかった！日本で言われる神社の「魔除けハート」ではないようです。

ペルシャ鉢のハートつなぎ文様は、とてもカラフルでユニークなハートですね。６～９世紀の頃のものということは、日本では、飛鳥時代から平安時代になるようです。

という事は、年代的にみて、ハートつなぎの文様は、ペルシャの方がずいぶんと古くなるようですね。有田のは17世紀初期伊万里の頃ですからね。ちなみに、中国でもハート文様があるかどうか尋ねましたところ、いまのところは見つかっていないようです。

さて、この発見は、ノーベル賞にはいたりませんが、日本で、ハートつなぎ文様が見受けられるのは、なんと「有田のハートつなぎ文様」だけとなります。すごい！唯一無二の「有田ハートつなぎ」大発見！になるのではないでしょうか。

それで、なぜ、いままで、このハートつなぎがクローズアップされなかったのでしょう？　私は、これには、ジェンダーの問題があるのではないかと考えます。　ジェンダーとはなんぞや？　いま盛んに社会で取り上げられているようですが、「男女間の差」とでも申しましょうか？どうも、一般的に男性は、ハートの形や、ハート（ハートマーク）♥に抵抗があるようです。

その点、女性といいますと、東京オリンピックで優勝された海外の選手の方が、ハンドサインに♥サイン（指でハートの形をつくる）を掲げて世界にアピールをされていたのを覚えていらっしゃる方もいらっしゃるでしょう。この傾向は、日本でも、特に子供から、大人まで、年配の女性の私など、写真でも、ハンドサインをいたし、ラインでも抵抗なく、ハートマーク♥をジャンジャンと過剰使用し、たぶん、みなさんから、顰蹙をかっていることでしょう。すみません。

ハートつなぎ文様の謎なのは、有田陶磁器創業以来４１２年間（磁器は創業４００年ですが、唐津焼きから始めたら）になりますが、有田焼が始まったといわれる1630～1640年間の初期伊万里時代から～1700年間の間のざっと７０年間、限定的な時代のみに♥つなぎ文様が施されているのです。まるで、古九谷のように開窯から閉窯（1688～1703）までわずか５０年というようにです。

ふふふ、ハートつなぎ文様になんだかミステリーの要素が加わりました。さあ、このミステリーの謎と驚きのドラマが潜んでいるに違いないハートつなぎよ、もう、カミングアウトしましょう！さあ、さあ！といっても、まだ、違和感があり躊躇されている史談会のみなさま、それでもまだ、ハートつなぎ文様に納得できないのでは？あの「黄地多彩文鉢」のハートつなぎの源流と思われる、鉢がペルシャからどうやって有田に渡ってきたのかと。

では、とりあえず、唐突ですが、ハートつなぎが出土した窯跡です。↖

1，黒牟田の山辺田窯跡の皿の陶片（染付）

2，小溝上、窯跡の大皿の陶片の数々（染付）

3．赤絵町、内山地区？、出土品はないが、古伊万里の沈香壺数種類輸出用品の色絵。

4．鍋島藩窯、初期鍋島が作られたといわれる「日峯社下窯跡」（1660‐1670）染付、後に、鍋島の染付、青磁、錆釉の皿の高台や「青磁染付桜文皿」の高台など側面に廻らされている。

**特徴は**ざっと、

1．山辺田窯跡：「玉取り獅子文小皿」、口縁部にハートつなぎ文が廻らされている。初期伊万里（1641 ～か）ぎょろり目の獅子2頭。

2．小溝上窯跡：ぶ厚い大皿に、ハートつなぎ文が大胆に大きく、恐れることなく皿のほう縁部に堂々と描かれている。一筆書き風。（1600～1620）

3．柿右衛門様式：「初期有田赤絵茶筅形花図徳利」徳利の下部に朱色の筆で鮮やかにハートつなぎが描かれている。初期有田寛文時代(1661-1673)
また、白くて、とろりとした釉薬のボデーの上にまっ赤に燃えてる色で重厚に描かれている。

初期有田赤絵茶筅形花図徳利

染付菊花文大皿　小溝上窯

玉取り獅子文小皿　山辺田窯跡

4．鍋島藩窯：「日峯社下窯跡」（1660‐1670）伝製品と思われる皿の高台に、染付のダミ（グラデーション）のハート繋ぎ文様が丁寧に、均等に描かれている。ハートを上下に描く時間は相当時間がかかるが、度外視されたと思われる。さすがに、とても丁寧に鍋島ハートつなぎは描かれいる。（1646‐1700頃）初期有田の寛文期の徳利と思われる。

青磁染付桜文皿　鍋島藩窯

さて、前置きがずいぶんと長くなりましたが、これからが、有田のハートつなぎの沈黙から覚める解き明かしのスタートです。ええええっ！！

源流はどうも、ペルシャではないかとヒントを得ましたので、ペルシャをいろいろ手繰り寄せていたら、ふと、思いだしたことがありました。

実は去年の春に兄とドライブし、名護屋城県立博物館へ行ってきましたが、その日は、朱印船貿易の品物で、ポルトガル風の首襟がアコーデオンみたいなシャツ（ひだ襟、Ruff）の展示を観に行った折りに、ふと豊臣秀吉の展示場に足を踏み入れたところ、ど派手で、豹かと思われる変わった模様の「陣羽織」が展示されていました。

その陣羽織の説明文で、再び、ピン！ときました。そうか、そうだったのかと。それは、ねねさんが高台寺に所有していた、陣羽織です。綴れ織り（つづれおり）というのは、もともとこの敷物はペルシャのカシャーン地方で製織された絨毯であったと考えられて、そこに表された獅子が獲物に襲いかかる文様は、ペルシャの伝統的な文様のひとつで、こうしたペルシャ絨毯は当時ポルトガル船によって日本にもたらされた。
異国情緒あふれる絨毯を陣羽織に仕立て陣中で綺羅を尽くそうとする桃

山武将の旺盛な意欲が感じられると書いてあるではありませんか。

あっ！ ポルトガルの船といえば「ガリオン船」。 **柿右衛門文書**に出てきます。ご存じ赤絵の始まりはで始まる「覚」（おぼえ）です。

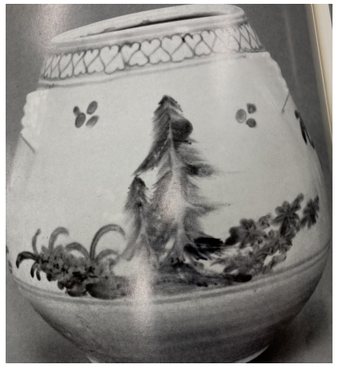
「、、略、、私がもと年木山にいたとき、頼まれたのでこの赤絵付けをしたが、うまく行かなかった。その後段々私は工夫をし、ごす権兵衛と二人で絵付けをした。そうして、かりあん船が来た年（正保3～4年、1646－47）の6月の初めの頃この赤絵物を長崎に持って行き.こうじ町の八観という唐人のところへ私は宿泊し、加賀筑前様のお買物師である塙市左衛門という人に売り始めた、、、略」

有田は、なんと、大航海時代から世界の海とつながったグローバルなとこだったのではありませんか？それに、加賀筑前様とも（前田利常）コンタクトをしていたとは、この時代からお付き合いがあったのだとこの柿右衛門古文書からみてとれます。

グローバルな領主といえば、となりの県で、新幹線の駅ができた新大村駅の大村領その領主はご存じ、大村純忠です。1533年生まれの彼は、日本最初のキリシタン大名です。

織田信長が1534年生まれと一つ違い。そして、なんと！驚くことなかれ！大村純忠の弟は有田盛（さこう）だったのです。

永禄十年（1567）有田盛は、有田唐船城領主になっているようです。今も昔も情報がすべて、有田のやきものの発展の裏には、グローバルな情報が飛び交っていたことでしょう。


初期伊万里 染付松図芋頭水指

では、ハートつなぎ文様はどのようにして芽生え、そして終わっていったのか？

はたして、16世紀半ばに日本に伝来したキリスト教（カソリック）のフランシスコ・ザビエルの燃えるようなハートの聖画から、有田のハートつなぎ文様がはじまったのかこれは、いまのところだれもわからないのですが、私には、ポルトガル船のガリオン船に乗ってやってきたザビエルと後の宣教師達が、カステラ、コンペ―糖、カボチャ、ザボン等を手土産に、そして有田の方言を駆使して、山辺田、小溝、南川原、岩谷川内あたりで、有田陶工の家族たちと交り、交流を重ね、病気の時にも災いのときにも、手を差し伸べお互い信頼しあい、宣教師がもたらした西・東洋情報（文化）を得て、ハートつなぎ文様が有田につながっていったのではなかろかと推測いたしておる今日この頃です。

史談会のみなさま、今年もどうか、♥ハートずくしのお話しにお付き合い下さいましたら幸いです。♥

# 戦争の傷跡

大串 和夫

ロシアとウクライナの戦争は、間もなく1年になろうとしています。今回は戦争に係る有田町内や外尾山地区（自宅）の状況を調査してみました。

まず、太平洋戦争時の遺跡について、旧有田町の蓮華石山（通称大神宮）349メートルの頂上には、日中戦争が始まった昭和12年に造られた防空監視所の残骸が残っています。

また、旧西有田町と長崎県境の八天岳707メートルの頂上付近には、戦時中、東から佐世保方面に飛来する米軍機を迎撃するための高射砲台跡や弾薬庫と思われるコンクリート製の遺構があります。

砲台跡の盛土の護壁と弾薬庫と思われる遺構

町内には防空壕が数ヵ所あり、現在確認できる場所は、岩谷川内1ヵ所（うなぎ専門店「味」の前に2穴あり）、外尾町1ヵ所（椎谷神社裏に5穴あり）、外尾山1ヵ所（八幡神社裏に3穴埋め戻し済み）などです。

外尾町には岩尾磁器の工場がありますが、昭和20年7月31日朝、米軍のグラマン機1機が飛来して工場に猛烈な機銃掃射を浴びせ、窯焼きの工員が即死され付近の方々が数名負傷

されています。

また町内各地区には、戦争で亡くなった方々の慰霊碑がありますが、私の地区の『忠霊塔』には、日清戦争の明治27年に1名、ノモンハン事件後の昭和15年に1名、日中戦争時の昭和16年に1名、太平洋戦争では23名の方が戦死されており、合計26名の方々を祀ってあります。

先の戦争では、男子4人に1人が出征し、2世帯に1人以上を兵士として送り出し、300万人の日本人が亡くなりました。色川大吉著「ある昭和史」には、5世帯に1人が死に、少なくても2000万人が悲歎の涙にくれたと書かれています。

上幸平天満宮下の砲台跡

戦時中には、町内のあらゆる金属製品が軍へ供出されており、町内の町並み保存地区などでは鉄扉や鉄格子など、社寺では鐘も供出されています。

旧有田町上幸平の天満宮下の広場に砲台があります。大砲が南向きに据えられていましたが、現在は供出され台座だけが残り、「大正四年八月青島攻圍軍がイルチス砲台ニ於テ分捕タル独逸海軍砲」の記述があります。

今回は戦争に係る傷跡について記述しましたが、戦争末期には様々な金属代用の材料を使用した陶磁器製の手榴弾、機雷や防衛食器、水筒、ボタン、貨幣などの金属代用品が数多く作られているので、次回はこれらを調査したいと思います。

最後に、私の父母は戦後満州からの引揚げ者ですが、二度と戦争が起こることがないようにとの思いで平和を祈念し、私の名を「和夫」と名付けられたと思います。

【参考文献】
「有田町史」通史編
「西有田町史」下巻
「九州の戦争遺跡」江浜明徳著

## 目からうろこ

吉永　登

会報6号（2021年7月増刊号）に大串和夫さんが紹介していた長崎大学多文化社会学部教授・野上建紀氏の近著「陶磁器考古学入門」は、陶磁器の生産・流通・消費の歴史を考古学的資料を素材として、人類の過去を明らかにしようとする画期的な著作である。

（著者の野上氏は、かつて有田町歴史民俗資料館で肥前磁器を中心とした近世のグローバル化以降の歴史を考古学的に研究されて、水中考古学の専門家としても知られている。）

昨年の西日本新聞に、20回にわたり「歴史のかけらを探して」と題して連載されたエッセイでは、海と時を超えて世界へ広がる「陶磁の道」が壮大なスケールで展開されていて、実にエキサイティングなシリーズであった。

今回、「目からうろこ」で紹介したいのは、スペインのガリレオ船による太平洋横断のルートが徐々に明らかにされてきたことである。鎖国時代の海外貿易は長崎に来航することができたオランダ船と唐船（中国船）に限られていて、特に連合東インド会社（VOC）の圧倒的な肥前磁器の輸出が中心であった。

ところが、新大陸のメキシコやフィリピンを植民地としていたスペインは、16世紀後半にマニラやアカプルコを結ぶマニラ・ガレオン貿易ルートを開設、「銀船」が新大陸の銀を持ち込み、「絹船」が絹や香料などアジアの産物を新大陸に運び、多くの中国磁器も太平洋を渡った。

以下、野上氏のエッセイから引用させていただく。

「一方、肥前磁器とガレオン貿易の関わりが議論されることはほとんどなかった。その理由の一つは「鎖国」のイメージによる。長崎に来航することが許されなかったスペイン船が肥前磁器を入手することを想像できなかったためである。そのため1960～1970年代、メキシコシティの地下鉄工事によって膨大な量の陶磁器片が出土し、その中に4片の有田焼が発見されても、ガレオン貿易と結びつけられることはなかった。当時はオランダ船によって大量の肥前磁器がヨーロッパに運ばれていたため、それをスペイン人がヨーロッパで入手し、メキシコに持ち込んだとする考えが支配的であったのである。

そしてもう一つの理由は、何よりガレオン貿易のアジア側の拠点だったマニラで一片も肥前磁器が発見されていなかったためである。マニラに持ち込まれないものが、ガレオン船でメキシコまで運ばれようがないというものだった。





さらに野上氏は調査研究を続け、次のような問題の核心に論及する。

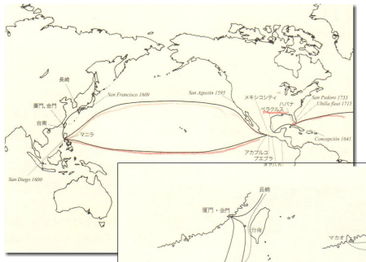
「研究の歯車が大きく動き出したのは、2004年6月のことであった。マニラ出土の陶磁器調査で数片の肥前磁器の陶磁片が発見されたのである。それはマニラのスペイン人居留区であるイントラムロスの遺跡から出土したもので、そのうちの一つはメキシコシティの地下鉄工事によって出土した有田焼と同じ種類のものであった。

それでは、マニラのスペイン人はどうやって肥前磁器を入手したのか。オランダ船は肥前磁器を輸出できるが、オランダはスペインと敵対しているためマニラに入ることは出来ない。そうなると長崎から積み出すことが出来て、マニラに運ぶことが出来るのは唐船ということになる。しかし、長崎からマニラへ唐船が直接輸出した記録は見当たらなかった。そのため、中継地を想定する必要があった。

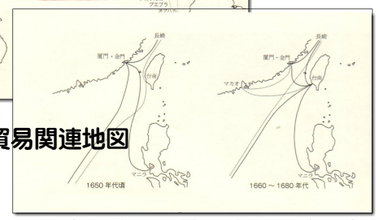
そこで鄭成功一派の勢力圏を中継地と想定し、台湾や中国沿岸部の調査を開始した。その結果、台湾の台南周辺、福建沿岸の金門島、マカオでそれぞれ肥前磁器が発見された。さらにマニラの税関記録にも台湾を経由して日本の産物がマニラに輸入されていたことが書かれていた。

陶磁器の記録も見られ、1666年4月2日の記録に「platos de japon（日本の皿）」とあるのは、肥前磁器の皿とみて間違いないであろう。

「鎖国」時代にスペインと交流のなかった日本であるが、長崎から肥前磁器を積み出した唐船は台湾などを経由してマニラに持ち込んだ。それをスペイン人がガレオン船に積み込んで、絹や香料とともに太平洋を越えて新大陸に運んでいた。もう一つの〝伊万里の道〟である。」



ガレオン貿易関連地図



長崎からマニラへの貿易ルート図

野上氏の調査研究は、まだ続けられるであろうが、世界を一周する壮大で新たな「陶磁の道」が明らかにされることを、胸を躍らせて期待している。

## 『超短編妄想小説』続編
## 陶石発見！その後

中村　貞光

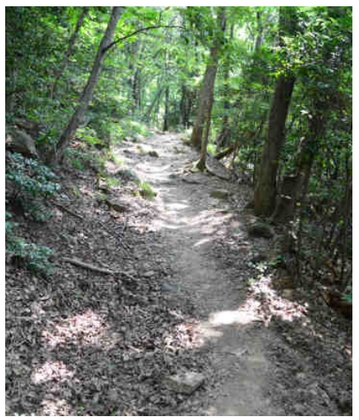
陶石の発見から十数年が経った。参平は長年の陶石探しの旅から解き放たれ、重かった肩の荷が下り焼き物作りにも活気が戻った。陶石の採掘場は仲間と自由に分かち合うようになり、参平たちの元には多くの同胞たちが集まってきて、賑わいを見せていた。

陶石の採掘場から下流に下ったところは近くに川もあり、仲間の小屋や住いがいくつも建っている。初めて訪れた頃は樹木が生い茂るだけの場所であったが今では見違えるほどの窯場になっていた。

陶石が見つかって以降、参平を頭に十数人の仲間がこの地に移り住むことになってからは、近隣から聞きつけた陶工たちが続々と移り住み総勢100人を超す集落へと変貌を遂げていた。

この地に移り住む前までは土を捏ねて焼くだけのいつもの変わり映えのない焼き物作りだったが、探し求めた泉山陶石で試し焼きをしてからは、磁器を焼くための本格的な窯作りにかかりっきりだった。

故郷で焼いていた窯はひとつの小さな単窯だったが、多くの焼き物を一度に焼くためには単窯では無理がある。数をこなすとなれば多くの窯がいるのだ。しかも効率的に焼くために窯が連なる窯が必要だった。窯と窯を並べるより二つの窯がくっついていると人の移動も少ない。さらに窯と窯の間に穴を開けることで余熱が伝わり結構高い熱が利用出来ることも確認できた。つい最近のこと、窯がいくつも連なる登窯を北波多にいる同胞の陶工たちが作ったと聞いていたので、参平は同郷の仲間と二人で出かけてきた。



北波多村の窯場までは八里ほどの道のりがあり、有田川沿いに有田西部の乱橋を抜け北へ向けて歩いた。春とはいえ三月の始めである。早朝からの出立はまだ肌寒く、急ぎ足で向かった。窯場に到着したのは昼をとうに回った頃だった。

「有田で焼き物を焼いている参平といいます。慶尚南道金海から来ました。こちらで新しい登窯を築かれたとお聞きし、是非とも拝見させてもらいたいと馳せ参じた次第です。こちらでは窯がいくつも繋がった登窯と聞いて驚きました。居ても立っても居られず伺いました」

「噂は聞いているよ。山を見つけたんだとな」

「はい。故郷の土より上質な陶土の感じがします。焼き物の出来も良くなりました」

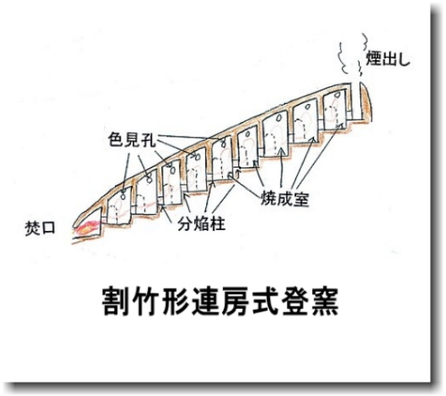
参平は持参した焼き物を差し出して見せた。絵付けは素朴で、まだまだ自信の持てるものではなかったが、需要に追いつかない状態になっていた。

「このところは各地からの注文も多く、苦労しています」

「それは凄いな！　俺らの焼き物は相変わらずだよ」

話し方からまんざらでもない様子で、笑顔で接してくれた。

山の斜面に細長い形をした大きな窯が飛び込んできた。近くに陶工たちの忙しく動き回る姿があった。参平は丁寧にあいさつをすると陶工のひとりが案内をしてくれた。




良く見ると細長い窯はいくつもの部屋が連なっており、個々の窯の焚き口がいくつも並んでいる。

焚き口の上部には小さな穴が開いており中を覗くことが出来るようになっている。窯の手前にやや大きめの焚き口があり、ここで最初に火を焚くようだ。窯の最上部には煙出しの穴が開いているので煙突がない構造になっている。

窯は連なった作りになっているので余熱の効率もかなり良さそうだ。窯（焼成室）の数も八部屋はあるようだ。北波多の窯では陶器が焼かれているが焼く温度が高く、器は硬く焼き締められていて、叩くと金属に近いやや高めの音がした。

参平らは北波多の窯場を後にすると帰路を急いだ。有田に着いたのは日暮れから随分時間が経っていた。参平は翌日から寝る間も忘れたかのように新しい窯作りに没頭した。

窯詰めの作業も改良を加え、一度に多くの焼き物が焼けるようになった。

あれから何年が経っただろうか。白川天狗谷の川のすぐそばの斜面に大きな登窯が出来上がっていた。

参平たちが築いた登窯はダンゴの形をした窯が連なるもので、北波多村で見た真っ直ぐな形の窯とは異なるもので、連房式登窯は明治時代以降まで長く続くことになる。

山の斜面の傾斜に合わせて窯が作られているので、個々の大きさが違う。何度も工夫を重ねて窯を改良し、焼き物の上がりも上々で品質もかなり良くなっていた。

この頃には国内への需要はうなぎ上りで、量産化への設備の改善は急務になっていた。大阪はもとより江戸からの注文も数多く、有田皿山は年々陶工の数も増え、多くの人たちが移り住むようになっていた。

数年前には佐賀本藩から役人が来て、初代の代官には山本神右衛門重澄が赴任し、代官所も出来た。皿山の上と下には番所が置かれ、人や物の出入りは厳しく取り締まるようになった。登窯も各所に増築され十ヵ所以上に増えた。

代官所の役割も強化され、陶工たちは監察札を持つものだけが窯に従事することを許され、それ以外の者たちの仕事への関与は厳しく制限されるようになった。

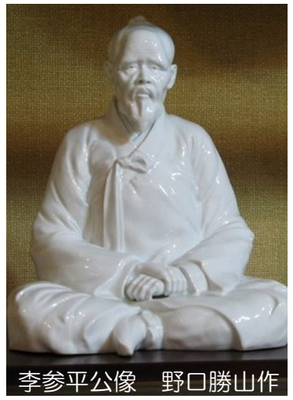
当時の有田磁器は、朝鮮陶工の手によって磁器焼成までは可能だったが、絵付けの出来る職人は未熟であった。初期の絵付けは、これまで海を渡ってきた中国磁器の模倣から始まり、少しづつは新しい絵を描いてはみても、絵付けは難しく進展がなかった。

この頃の中国は明から清へ移り変わる激動の時代を迎えていて、磁器生産の中心地である景徳鎮では陶工たちが職を失い路頭に迷う事態に遭遇していた。職人たちの一部は海を渡り日本へ渡来して来た者も少なくないと思われる。このような時代の変化が重なり、日本では焼き物生産に大きな進展がもたらされたと推測できる。

有田皿山では各所の登窯からの煙が1年中立ち上り、窯焚きたちの忙しく動き回る姿が見える。皿山を流れる川の随所では唐臼の音が響き渡っている。皿山中は人が忙しく行き交い、人の声が絶えることなく、賑わいの日々が続いた。






李参平公像　野口勝山作

明暦元年8月11日、日本最初の磁器の誕生に大きく寄与した参平が亡くなった。有田皿山では参平の死を悼む、同胞たちの悼み悲しむ「アイゴ～アイゴ～」の涙声が何日も続いた。思いも依らぬ時代の波に飲まれながらも、異国の地で最後を遂げることになった参平は有田の地で永遠の眠りについた。

有田皿山はその後も多くの陶工たちの飽くなき努力が実を結び、日本磁器誕生の地としての名声を高めることになった。

17世紀後半から、海外貿易への焼き物需要が一段と増え、有田皿山は不夜城と化した。この時代から約一世紀の間、数百万個ともいわれる伊万里焼（有田磁器）が海を越え海外へもたらされ、ドイツマイセン窯誕生に大きな影響を与えたといってよい。

## 伊能忠敬測量隊と有田郷図

時代が大きく流れて、有田皿山の町中も大きな家が立ち並び、有田千軒と呼ばれるくらいに変貌しているが、安政6年（1859年）の**「松浦郡有田郷図」**では、活力溢れる当時の有田皿山の様子が活き活きと描かれているが、この時代から遡ること46年の文化10年（1813年）9月には、前年の9月以来二度目の伊能忠敬測量隊の一行が有田皿山の街道を通り測量を行っている。

文化10年の伊能忠敬測量隊の測量日記では、9月19日に時津を立船、川棚、波佐見を経て、9月21日岩峠を通過したあと、「・・・武雄道、伊万里道追分㋥印を残、・・・此より伊万里道へ・・・南河原、乱橋、黒郷・・岩谷河内村に八ツ時頃に着。」

「同二十二日　晴天。六ツ時後岩谷河内村出立。松浦郡外尾村、武雄道、伊万里道追分㋥印より出初武雄道を測る」と記されている。

このあと、有田街道を歩いて測量、岩谷河内川を渡り、中野原、稗古場、赤絵町、法元寺、桂雲寺、本幸平、白川、八幡宮、大樽、上幸平、西光寺、泉山、弁天社を通過し、「本村より此処町並人家続て二十二町家六百八十三軒。」とあり、当時の町並みが記されている。

その後、伊能忠敬測量隊の一行は野陣小休ののち、「・・・杵島郡立野河内村狩立、三間坂村、鳥海村、永尾村、西山村を通り、本村人家入口、長崎街道へ出打止㋥印を残、即追分、皿山越横街道終る。」と記録が残っている。

松浦郡有田郷図の本幸平・大樽付近（安政６年）

※「松浦郡有田郷図」を見ると、当時のままの路地も数多く残り、活力溢れる当時の有田にタイムスリップし思いを馳せることが出来る。

## あとがき

新年の仕事始めは、今年も有田史談会の「会報」作りでスタートです。

会報は、２０１８年２月号から今と同じＡ３版を中折で作成しています。

３年ほど前から、作成途中でレイアウトが突然バラバラになるという悪夢のようなアクシデントが起こるようになり、最近では作成途中で何度も保存を繰り返しながらの作業になりました。ワードのソフトも長く使ってきましたが、新しいソフトに買い替えてから、この不思議な現象が起こるようになっています。通常なら、アクシデントが起きても、**元に戻す**（Ctrl+Z）で直前の入力に戻りますが、バラバラ状態になると、全くこの手順を繰り返しても修復できず、全くのお手上げ状態になるのです。

今回も、この悪夢と戦いながら作業を続け、ようやく作業が完了しました。今回も予定通り皆様の手元にお届けすることが出来て安堵しているところです。